

中広：《K》はなぜ自殺したのか？ ——夏目漱石の小説『こゝろ』に関する精神医学的解釈の試み

《K》はなぜ自殺したのか？

——夏目漱石の小説『こゝろ』に関する精神医学的解釈の試み

中 広 全 延

要約：夏目漱石の小説『こゝろ』の登場人物《K》の自殺に関して精神医学的考察を試みた。《K》は《先生》と同じく「自己愛性人格をもつ人」である。《K》の自殺は決行の場所など状況から判断して、決して自責的ではなく他責的である。彼は自分が「精進」「道」と呼ぶ精神修養に邁進しているとの信念により、誇大な自己を維持していたと考えられる。そのような《K》にとり、恋愛感情などは精神の修行に反する最も軽蔑すべきものであった。彼の自殺は自己愛という視点を設定すれば、誇大な自己の崩壊による自信喪失と無用者感が原因と推定される。この推定は作中の多くの記述と整合性があるように見える。

1. 『こゝろ』は1914年（大正3年）4月から8月にわたって東京大阪両朝日新聞へ同時に掲載された夏目漱石の小説で、同年9月岩波書店から単行本が刊行された。読む者に感動を与える国民的文豪の名作で、漱石の作品中最もよく読まれているという。したがって、いろいろな読み方、多様な評価があってもおかしくない。

森田草平は《先生》から遺書を授けられる《私》のモデルは小宮豊隆だと思って読んでいたという^[1]。一般の読者は必ずしも《私》を实在の人物と関係づけては読まないだろう。また、梅原猛は「滑稽小説『吾輩は猫である』と、それに続く『坊っちゃん』にあった「笑いはだんだん漱石の作品からなくなり、最晩年の『道草』『明暗』は自然主義の作品以上に暗い」、「私は、漱石は……笑いを忘れた作家になったのではないかと思う」と評している^[2]。漱石は大正5年（1916年）『明暗』の連載執筆中亡くなった。大正3年の『こゝろ』は『道草』のひとつ前、晩年の作品であり、暗い小説である。しかし、暗さが支配する中に一条の光が射すと見る人も多い。

筆者は『こゝろ』のいろいろな読み方や解釈のうち精神医学的アプローチを試み、《お嬢さん》の笑い^[3]、《私》の存在理由^[4]、《先生》の自己愛^[5]について既に論じた。本稿では《K》の自殺に関して精神医学から見た、もっと限定して言えば、自己愛という視点から試論を展開したい。

『こゝろ』のストーリーや登場人物についての詳述は省略するので、別途『こゝろ』を参照いただきたい。なお『こゝろ』からの引用は新潮社文庫版^[6]による。

2. 「自己愛性人格をもつ人」^[7,8]は尊大で傲慢な極とその正反対の屈辱感や羞恥心の両極をあわせ持つ。《先生》が自己愛性人格をもつ人であることは、前に指摘した^[4,5]。

「二人（《先生》と《K》：筆者註）は東京と東京の人を畏れました。それでいて六畳の間の中では、天下を睥睨するような事を云っていたのです」（『こころ』「下 先生と遺書 十九」から引用。以下、引用箇所は「下 十九」のように記す）

このような記述があるように、《先生》と同じく、《K》も劣等感と誇大性の両面を持つ。さらに、《K》は《先生》以上に鎧でガチガチに固めているとの印象が強い。

「書物で城壁をきずいてその中に立て籠もっていたようなK」（下 二十五）

鎧により自己の弱さを守ろうとしていたと考えられる。これらを含めて全体把握により、《K》も自己愛性人格をもつ人であることは明らかである。

3. 《K》は《先生》の分身との指摘がある。そう思って読んでみると、《先生》と《K》が対をなすような記述がいろいろある。

「Kの神経衰弱はこの時もう大分可くなっていたらしいのです。それと反比例に、私（＝《先生》：筆者註）の方は段々過敏になって来ていたのです」（下 二十八）

（「下 先生と遺書」の部分は《先生》が一人称＝私で書いているとの形をとっているので、そこでの「私」は《先生》である。本稿以下の引用で、このことはいちいち註記しない）

また次のような箇所がある。

「Kは心持が悪いから休んだのだと答えました」（下 三十二）

その直前、《K》は《お嬢さん》と談笑していた。あれほど勉学に打ち込む彼がわざわざ学校を休むほど体調が悪いとは思えない。そう考えてよいなら仮病である。これは結婚の申し込みをするため、《先生》が仮病を使ったことに対応する。

しかし、二人の対称性を一番痛感させるのは、「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」という言葉においてである。

「私は先ず『精神的に向上心のないものは馬鹿だ』と云い放ちました。これは二人で房州を旅行している際、Kが私に向かって使った言葉です。私は彼の使った通りを、彼と同じような口調で、再び彼に投げ返したのです」（下 四十一）

お互い自分の分身に向かって同じ言葉を投げかけているのである。この言葉は、物語の展開上非常に重要な役を演じる。漱石は、《先生》と《K》が対称形となるべく、ことさら配慮しているように見える。

4. 精神科医の市橋秀夫は自己愛性人格（障害）をもつ人をジェット機にたとえている^[9]。自尊心や賞賛といった燃料が補給できず、誇大な自己が崩壊すると墜落する。具体的には自信喪失や無用者感とともにうつ状態に陥ることが多いが、他にもいろいろな精神医学的症状を呈す

中広：《K》はなぜ自殺したのか？ ——夏目漱石の小説『こゝろ』に関する精神医学的解釈の試みる。ときには自殺もありうる。精神科医の近藤三男は、「自殺があっても、それは『身を犠牲にして復讐する』といった怒りをともなうタイプのもので」、「他責的であって自責的ではない」としている^[10]。

もし仮に自分の家に下宿人がいるとして、その人物が家の中で自殺したら、これは正直なところ迷惑な話である。《K》は頸動脈を切って自殺したので、飛び散った血液の掃除が大変だというようなレベルではないだろう。襖や畳を新しく交換したとしても、たいていの人はその部屋を平気でつかう神経を持ち合わせていないのではないか。現に、《先生》と《お嬢さん》とその母親は引越している。このような事情を《K》は気がつかなかったのだろうか。《K》の遺書には次のような文句が見える。

「奥さんに迷惑を掛けて済まんから宜しく詫をしてくれという句もありました」（下 四十八）

《K》は迷惑が掛かることを十分に承知していたと考えてよいだろう。田中澄江は、「それにしては借りている家の襖を血で染めるという無神経さもやりきれない事であり、明らかに残されたものに重い十字架を背負わせるということで、一種の復讐死となる」としている^[11]。過去における典型的なうつ病者は、自殺するにしても自責的である。一方、《K》の自殺は他責的である。決行の場所など状況から判断して、「一種の復讐死」であり、自己愛性人格をもつ人に特徴的なものと考えられる。

誰に対する復讐か。「残されたもの」に対する復讐である。その「残されたもの」とは、《先生》と《お嬢さん》であり、《お嬢さん》の母親を含めてよいかもしれない。さらに、自分を養子に出した実家の親兄弟も復讐の対象だったのではないか。《K》は養子に出されて自分の家にとって無用の者と感じていたのではないか。彼は養父の意向を無視したため、養家でも居場所を失っていた。

5. 「彼（＝《K》：筆者註）は、常に精進という言葉を使いました。そうして彼の行為動作は悉くこの精進の一語で形容されるように、私には見えたのです」（下 十九）

「Kは昔しから精進という言葉が好きでした。私はその言葉の中に、禁慾という意味も籠っているのだろうと解釈していました。然し後で実際に聞いて見ると、それよりもまだ嚴重な意味が含まれているので、私は驚きました。道のためには凡てを犠牲にすべきものだと言うのが彼の第一信条なのですから、摂慾や禁慾は無論、たとい慾を離れた恋そのものでも道の妨害になるのです」（下 四十一）

《K》は自分が「精進」「道」と呼ぶ精神修養に邁進しているとの信念により、誇大な自己を維持していたと考えられる。夏休み二人で房州を旅行した際、《K》は《先生》に「精神的に向上心がないものは馬鹿だと云って、何だか私をさも軽薄もののように遣り込める」（下 三十）ことがあった。そのとき《K》は自分は精神的に向上心があるから賢く偉いと自己評価

していたはずである。たとえそれがほんとうは自己評価が低いこと、自己不信の裏返しとしても。彼の禁欲、ストイシズムの奥に自己愛が潜んでいると私は見る。

また、恋愛感情などは精神の修行に反する最も軽蔑すべきものであった。考えようによっては傲慢きわまりないが、彼にしてみれば、「道の妨害になる」恋にうつつをぬかすような者は「精神的に向上心のないもの」であり「馬鹿だ」となる。

《K》は《お嬢さん》に恋心を抱くようになったことを、上野の公園で、《先生》から「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」（下 四十一）と攻撃される。

この《先生》の一撃を浴びる前から既に《K》は理想とする自己イメージから遠く外れて恋愛の淵に陥ったこと、そのこと自体により誇大な自己の危機に瀕していた。

「私がKに向かって、この際何んで私の批評が必要なかと尋ねた時、彼は何時もにも似ない悄然とした口調で、自分の弱い人間であるのが実際恥ずかしいと云いました」（下 四十）

「弱い」「恥ずかしい」という言葉が雄弁に語っているように、《K》の心のなかでは振り子が尊大で傲慢な極からその反対の屈辱感や羞恥心の極に動いていた。

「Kが理想と現実の間に彷徨してふらふらしているのを発見した私は、ただ一打で彼を倒す事ができるだろうという点にばかり眼を着けました」（下 四十一）

「理想」は「精進」「道」に励み「精神的に向上心の」ある強い自分だが、「現実」は「弱い人間であるのが実際恥ずかしい」自分であり、その「間に彷徨してふらふらしている」のである。ジェット機の比喻ならば、燃料不足で「ふらふら」と低空飛行しているとなろう。《先生》は「ただ一打で彼を倒す事が出来るだろう」と、偽りにせよ従来持っていた自信が「ふらふらしている」《K》に対して決定的な「一打で彼を倒す」のである。

「私は先ず『精神的に向上心のないものは馬鹿だ』と云い放ちました」（下 四十一）

自分が言ったのと同じことを他人から言われ、その意味するところがよくわかっているだけに、ここで《K》の誇大な自己はこっぱみじんにされてしまったと思われる。これは、「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」という言葉は、Kにとって痛いには違いなかったのです」（下 四十一）という《先生》の推察の形を借りた記述によっても、裏付けられる。

「『精神的に向上心のないものは、馬鹿だ』

私は二度同じ言葉を繰り返しました。そうして、その言葉がKの上にもどう影響するかを見詰めていました。

『馬鹿だ』とやがてKが答えました。『僕は馬鹿だ』（下 四十一）

この《K》の発言は自信喪失や無用者感が彼をおそったものと解される。ジェット機の墜落である。

6. 上野の公園で二人が対決した終わり近く、《K》は「覚悟、——覚悟ならぬ事もない」（下 四十二）と発言するが、その真意、何に対する覚悟かを彼は確定的には言わない。この「覚悟」

中広：《K》はなぜ自殺したのか？ ——夏目漱石の小説『こゝろ』に関する精神医学的解釈の試みという言葉をめぐって、《先生》は物事の半分しか見えていなかったという意味の表現があり、《先生》が誤解したと読める箇所がある。そう読んでよいなら、《先生》のように「Kが御嬢さんに対して進んで行くという意味にその言葉を解釈」（下 四十四）するのは間違いで、自殺の覚悟という意味にその発言を解釈すべきとなる。この解釈をとると、《K》はその時点で、つまり上野の公園でジェット機が墜落したとき、既に自殺を考えていたことになる。そして、彼は自殺する。

《K》の自殺が誇大な自己の崩壊にともなう自信喪失や無用者感による、とここで仮定しよう。その場合、作者漱石としてはすぐに、あるいはあまり目をおかず、《K》を自殺させたいはずである。ただしストーリーの展開として、この時点で《先生》はまだ結婚の申し込みをしていない。作者はまだ《K》を自殺させるわけにはいかない。そこで、「上野から帰った晩《K》が襖を「二尺ばかり」開けて《先生》の様子をうかがうシーンが「下 四十三」に挿入されたと私は考える。

「上野から帰った晩は、私にとって比較的安静な夜でした。……

私は程なく穏やかな眠に落ちました。然し突然私の名を呼ぶ声で眼を覚めました。見ると、間の襖が二尺ばかり開いて、其所にKの黒い影が立っています」（下 四十三）

《K》が死んでいるのを《先生》が発見した晩も、次に引用するように、襖が開いていた。

「見ると、何時も立て切っているKと私の室との仕切の襖が、この間の晩と同じ位開いています」（下 四十八）

これは二つ晩の《K》の行動の類似性を示唆する。「二尺ばかり」ではなくわざわざ「この間の晩と同じ位」とするからには、両晩に彼が同じことをしようとしたと漱石は強調したいのではないか。つまり《K》は自殺した晩も「この間の晩」（＝「上野から帰った晩」）と同じく襖を開けて《先生》の名を呼んだのではないか。

次に、「上野から帰った晩」の翌朝の描写を引用しよう。

「然し翌朝になって、昨夕のことを考えて見ると、何だか不思議でした。私はことによると、凡てが夢ではないかと思いました。それで飯を食う時、Kに聞きました。Kはたしかに襖を開けて私の名を呼んだと云います。何故そんな事をしたのかと尋ねると、別に判然した返事もありません。調子の抜けた頃になって、近頃は熟睡が出来るのかと却って向うから私に問うのです。私は何だか変に感じました」（下 四十三）

《先生》には「何だか変に感じました」だけであるが、《K》にとっては「近頃は熟睡ができるのか」と《先生》が熟睡しているかどうか確かめる必要があったのだ。なぜなら、《先生》が起きていると、あるいは浅い眠りで気配を察して起き出して来ると、自殺を阻止されてしまうだろうから。実際に自殺が行われた晩は《先生》が目覚めなかったので、《K》はそれを行い得たと想像される。ならば、「上野から帰った晩」は《先生》が「私の名を呼ぶ声で目を覚めました」ということがあったので、《K》はそのとき決行しなかった（できなかった）こ

とになる。もし「上野から帰った晩」《先生》が目を覚まさなかったら、《K》は自殺したはずである。ただそれではもちろん小説のストーリーはまったく別ものになってしまう。

《K》の自殺の原因が誇大な自己の崩壊によるならば、それに引き続きその日に自殺が遂行されてもおかしくない。いや、そのほうが因果関係がはっきりする。漱石は、小説の構成上、自殺の決行日を延期したのだ。こう考えると、「上野から帰った晩」(下 四十三)の場面の存在理由がうまく説明できる。《先生》には理解不能の「何だか変」な《K》の言動が、合理的に理解可能となる。

7. 《K》は《先生》と《お嬢さん》の結婚の約束を知っても超然としていた。この《K》の態度を《先生》は《K》の人間としての立派さと解した。しかし、上記仮定の下では、《K》にとって失恋は二の次で、「精進」「道」と称してまがりなりにも安定していた自己評価が崩れたことのほうが決定的であった。婚約を知らされた前と後で《K》の様子が変わらないことを、こちらでもうまく説明できる。

《K》の自殺の原因を失恋ではなく誇大な自己の崩壊にともなう自信喪失とすると、遺書にある「自分は薄志弱行で到底行先の望みがないから、自殺する」(下 四十八)という文は、自信喪失の正直な表明と読める。また、遺書に《お嬢さん》の名前だけは何処にも見えないのは《K》がわざと回避したと《先生》は解した。これは《先生》の屈折した裏返しの解釈であり、《K》の自殺にとって《お嬢さん》は直接的な役目を果たしていないから触れられていないだけである。自信喪失を自殺の原因とすれば、このように、遺書は彼の気持ちを率直にあらわしており、文面どおりの理解が可能となる。

《K》に関する記述は、あくまで《先生》の目を通してのものであり、《K》の本当の内面を反映しているとはかぎらない。自己愛の概念を用いていないが、菅野圭昭も私とほぼ同じ解釈を提出している^[12]。

8. 「同時に私はKの死因を繰り返し繰り返し考えたのです。その当座は頭がただ恋の一字で支配されていた所為でもありましょうが、私の観察は寧ろ簡単でしかも直線的でした。Kは正しく失恋のために死んだものとすぐ極めてしまったのです。しかし段々落ち付いた気分、同じ現象に向って見ると、そう容易くは解決が着かないように思われて来ました。現実と理想の衝突、——それでもまだ不十分でした。私は仕舞にKが私のようにたった一人で淋しくって仕方がなくなった結果、急に所決したのではなからうかと疑がい出しました」(下 五十三)

《先生》は、当座は「Kは正しく失恋のために死んだものとすぐ極めてしまった」が、「段々落ち着いた気分」「繰り返し繰り返し考えた」末、「淋しくって仕方がなくなった結果、急に所決したのではなからうかと疑がい出」す。この「疑がい」が、《K》の自殺に対する《先生》の結論ではないだろうか。

中広：《K》はなぜ自殺したのか？ — 夏目漱石の小説『こゝろ』に関する精神医学的解釈の試み

無用者感とは自分が用の無い者と感じることだから、それは「たった一人で淋しくて仕方なくなった」という絶対的淋しさに通じる。ゆえに、《K》が無用者感を持ったとする仮定は、《先生》の最終的な推論と一致する。自分は用の無い者と感じたから《K》が「所決した」と考えると、初め《先生》は《K》の死因をとり違えていたが、最終的に自殺の本当の理由に行き着いたと自然に読める。《K》の自殺は、自己愛という視点を設定すれば、誇大な自己の崩壊にしたがう自信喪失と無用者感が原因と推定される。この推定は作中の多くの記述と整合性がある、と私には見える。

9. 確かに、《K》は失恋のため自殺したとも読める（私の仮説からすれば、誤読できる）。なぜ漱石は込み入った（誤解を生むような）書き方をしたのだろうか。終わりに、この点について考えてみたい。

「然し私の尤も痛切に感じたのは、最後に墨の余りで書き添えたらしく見える、もっと早く死ぬべきなのに何故今まで生きていたのだろうかという意味の文句でした」（下 四十八）

《K》の遺書の最後に書かれていたこの「もっと早く」をいつ頃と考えるか、いろいろな解釈があるだろう。いずれをとるにせよ、決定的な根拠は作品内に書かれていないようにも思える。しかし、上で述べた仮説に従えば、上野で二人が対決した日その晩に「死ぬべきだ」という解釈になる。《K》の自殺を時間的に移動したことの言い訳として、「もっと早く死ぬべきなのに何故今まで生きていたのだろうかという意味の文句」を、漱石が「墨の余りで書き添えたらしく見える」のは、自説に固執する私だけかもしれない。

小説内では、上野の対決からおよそ二週間後に、《K》は自殺する。いましばらく自説に固執してそのラインで考えると、時間的な因果関係としては無理が生じる。にもかかわらず作者がわざわざ《K》の自殺を延期したのは、《先生》に裏切り行為の時間的余裕を与えるためだと私は思う。

「私は一寸眼を通しただけで、まず助かったと思いました」（下 四十八）

この引用は、《先生》の行為が原因で自殺するとは《K》の遺書に書かれていないことがわかったときの《先生》の感想である。

初めて『こゝろ』を読んだとき、ここが山場だと思った。「少なくともみんな普通の人間なんです。それが、いざという間に、急に悪人になるんだから恐ろしいのです」（上 二十八）という《先生》の言葉をこの小説のメイン・テーマと読んでいた。《先生》は一生かけて後悔するが、自分の悪事が世間に露呈しないことを土壇場では正直に「まず助かった」とよるこんでいる。これが人間心理というものだと言いたかった。そのように過去の私は解釈した。この場面およびここに至る《先生》の心の動きも作者が書きたかったことであるとしなければ、《K》の自殺延期が説明できない。

上野の公園での対決シーンに、次のような文が見える。

「私はただ K が急に生活の方向を転換して、私の利害と衝突するのを恐れたのです。要するに私の言葉は単なる利己心の発現でした」(下 四十一)

ここに「利己心」という言葉が出て来る [註]。漱石は《先生》に三角関係のため親友を裏切らせ、それが原因で自殺が起こるかのような展開にして、利己心という人間心理も追求しなかったと現在の私は解釈している。吉本隆明の表現を借りれば、「これはやはり心の動きの形而上学を物語にした」^[13]となろう。

《K》が「覚悟」と言ったとき、「彼の調子は独言のようでした。又夢の中の言葉のようでした」(下 四十二)と何の覚悟も明確にせず、《先生》に誤解の余地を残しておくことが必須だったのだ。そして、《先生》は利己心に翻弄され、いよいよ裏切りの行動に移る。

『こゝろ』の単行本発刊にあたって、漱石自身が書いた広告文は、「自己の心を捕へんと欲する人々に、人間の心を捕へ得たる此作物を奨む」であった。

[註]

自己愛性人格 (障害) のイメージとして、自己中心的というものがある。その「自己中心的」は、ややもすると「利己的」と同義にとられかねない。確かに自己愛性人格 (障害) をもつ人が利己的であることは多いが、ナルシズム (自己愛) はエゴイズム (利己主義) に直結しない。

例えば、献身的に他人や社会につくす人や、慈善事業に執心する人が、たとえ本人が明確に意識せずとも心の奥底で、客観的評価以上に「自分はこんなに立派な事をする素晴らしい人間だ」と誇大に自己評価していたり、その行為を世間から賞賛されて、自己愛を満足させている場合があるかもしれない。ただ、あまりに露骨なときは偽善ということになろう (慈善はすべて偽善との意見もあるが)。しかし、本当に困っている人を助けまた社会に利益をもたらすならば、その自己愛は利他的である。自己愛と利己主義は同等ではない。

前にカラヤンをめぐって論じたように^[7,8]、自己愛はマイナス方向だけでなくプラス方向もある。価値を生む原動力になりうる。

文 献

- [1] 仲秀和：『こゝろ』研究史 和泉書院 2007
- [2] 梅原猛：百人一語 新潮社 1996
- [3] 中広全延：「夏目漱石『こゝろ』における「笑い」について」 夙川学院短期大学健康管理報告 2008 no.17 pp.3-7
- [4] 中広全延：「夏目漱石の小説『こゝろ』の登場人物《私》の存在理由」 夙川学院短期大学健康管理年報 (旧 健康管理報告) 2009 no.18 pp.3-8

- 中広：《K》はなぜ自殺したのか？ ——夏目漱石の小説『こゝろ』に関する精神医学的解釈の試み
- [5] 中広全延：「自己愛性人格をもつ人」は過去にも存在するか？／夏目漱石『こゝろ』の登場人物における自己愛について」 第104回（2008年）日本精神神経学会学術総会 特別号（抄録） <http://www.jspn.or.jp/members/run.php>
- [6] 夏目漱石：こころ 新潮社 1952
- [7] 中広全延：「自己愛性人格障害の診断基準の有効性について，指揮者フォン・カラヤンをめぐって」 精神神経学雑誌 2004 vol.106 pp.304-310
- [8] 中広全延：カラヤンはなぜ目を閉じるのか——精神科医から診た“自己愛” 新潮社 2008
- [9] 市橋秀夫：「診断のための鍵」 市橋秀夫編集 パーソナリティ障害・摂食障害 メジカルビュー社 2006 pp.89-97
- [10] 近藤三男：「自己愛型人格障害の症候学」 精神科治療学 1995 vol.10 pp.1223-1229
- [11] 田中澄江：「心」の上演」 新潮 1987年2月号 pp.188-189
- [12] 菅野圭昭：「実践報告 夏目漱石「こころ」Kの死について——」 国語通信 1976年10月号 pp.28-31
- [13] 吉本隆明：夏目漱石を読む 筑摩書房 2002